



馬耳東風

新年を迎えてまた歳を重ねた。日頃、独善的にならぬよう寛容の精神を心掛けていたのだが、世の中の不条理や世代間のギャップも少なからず感じるこの頃である。安泰な新年を迎えたと思った矢先、フランスで新聞社に対するテロ事件が起きた。米国で起きた映画の公開をめぐる脅迫事件の後だけに、表現の自由や多様な価値観を持つ社会を標榜する欧米社会にとってその衝撃は大きかった。殊に今回のテロが宗教的背景を持つものだけに暗雲が立ちこめたような不気味な影を感じる。表現の自由の範囲はその社会が受け入れられる許容度で決まってくると思われるが、フランスにおいても世論は二分されているようだ。表現の自由といえども人権侵害、名誉棄損、誹謗中傷などのように法律に抵触する事柄が様々な分野で定められている訳で、全く自由でないことも確かである。いずれにしてもその権利を行使する者は同時にそれに関する義務と責任が同値で伴っている訳でそれらから免れることはできない。

宗教論を述べるつもりはないが、宗教は他者を敬い、社会に貢献できるよう自己を高め、心の平安を目指す精神修養の指針と思っている。決して排他的に教義を強要したり、攻撃したり、殺人を容認するものではなく、むしろ寛容な心を目指すものであろう。唯一絶対の信仰の対象を持つ一神教徒と比較して、日本人の宗教観は「多神教の寛容さが際立っていること」と言われる。自分自身は仏教徒の家庭に育ったが、神道に関連する行事に違和感なく参加してきた。人生で最大の出来事である結婚

式も神前で行った。神道ではその御神体として神話や歴史などに出てくる人物もあれば様々な自然物もあるなど多種多様なものが祀られており、開祖も無ければ教典も無いという。今まで、機会を見つけてはその土地の神社仏閣に参詣してきたが、参詣の目的は強いて言えば、静かな境内の雰囲気にと時の心の安らぎを求め、荘厳な建造物を仰ぎ、古の人々に思いを馳せつつ、生かされていることに感謝するという事であろうか。自分自身は信仰心の強い人から見れば異質と思われるかも知れないが、かなり多くの日本人はこのような宗教的寛容さを持って生きているように感じている。生きる上での宗教の重要性は理解できるが、歴史の中でしばしば宗教の違いが戦争、紛争の原因になってきたことを考えると、日本人の持つ宗教的寛容さは紛争の無い世界の実現に向けて必要な条件かもしれない。最近、非常に気になることは、自他の関係においてこの「寛容」という価値観が失われつつある様に思えることだ。人格を持った二人の人間がものの考え方において完全に一致することなどあり得ないことで、「小異を捨て大同に付く」ことは相互に信頼関係を築くうえで必須条件であろう。この「寛容力」が希薄化した背景には、思考回路がデジタル化されて他人は異質という捉え方が強くなり、人々に気持ちの余裕が無く、利己的になってきたことがあると思われる。最近の政治の世界でもこの傾向が強く感じる。この潮流は何を招くか。安岡正篤の言葉を借りれば、「深沈厚重なる資質を備え、知識・見識・胆識の3識を持った政治家が国を治めなければ全世界から信頼される国にはなれない」ということになる。(青)